

Special Essay

命の尊さ

皮膚科学講座 名嘉眞 武国

私を含め医師はその仕事柄、人の命に関わることがあり、そしてご本人また家族そして周囲の方達のいろんな思いを直に感じ取ることがあります。時には気持ちを共有することもあり、時には複雑な思いも感じ取ることもあると思います。近年命をいとも簡単に失うような悲惨な事件などがマスコミを通して連日のように伝わってきます。本当になぜ家族を？ なぜ自らの命を？ なぜ幼い子を？ なぜ見知らぬ人を？ いろんな環境変化で追い詰められたためなのか？ とはいえ疑問が尽きません。私は両親が沖縄の生まれで戦争の時期に亡父は18歳の時に爆弾を抱えて走り回っていたり、母は幼小児期に実際に目撃した悲惨な現場から台湾と沖縄を往復しながら逃げ回っていた話は聞いていました。しかし私自身は久留米で生まれ育ち、もちろん戦争など経験はなくどちらかというと戦争に対して興味など持っていませんでした。また沖縄には家族旅行や法事などの目的でしか行くことはなかったのですが、数年前たまたま母親も一緒に家族で沖縄の南部の沖縄県平和祈念資料館と平和の礎（いしじ）を訪れる機会がありました。平和の礎には国籍や軍人、非軍人関係なく沖縄戦で亡くなった方達が刻銘されており、私の親戚の方の名前もありました。そこでご両親を戦争で失ったタクシーの運転手と母親からゆっくりと当時の話を聞きながら平和の礎の海岸の絶壁から海を眺めながら、当時の状況を想像でしかありませんがしっかりと思い浮かべてみました。海や空から迫りくる米軍の恐怖、集団自決（家族同士の残酷な実態など）の凄まじき惨事、神風特攻隊の悲劇など自分自身の命をかけた目的に対してその実施した決断に戦争を体験した人たちに対する理解不足であった私自身の情けなさとも表現できない強烈な悲しみに涙が溢れしばらく止まりませんでした。沖縄には「命（ぬち）どう宝」という言葉があります。一部にはこの言葉を問題視する意見もあると聞きますが、この言葉の最も意味することは「命をそまつにはいけない」というものです。戦争を体験した人たちの心からの叫びと思われまいます。いかがでしょうか。まだまだ私自身も日々反省すべき点が多く今後も機会があれば訪れて命の尊さについて考え感じ取ってみたいと思います。沖縄には観光も魅力的ですが、今の時代だからこそゆっくりと戦跡も訪れてみて是非命について何かを感じ取ってみたいはいかがでしょうか？ そうすると命の尊さに対する新たなる思いと自分自身の日々の考えの良い意味での反省となるのではと思います。